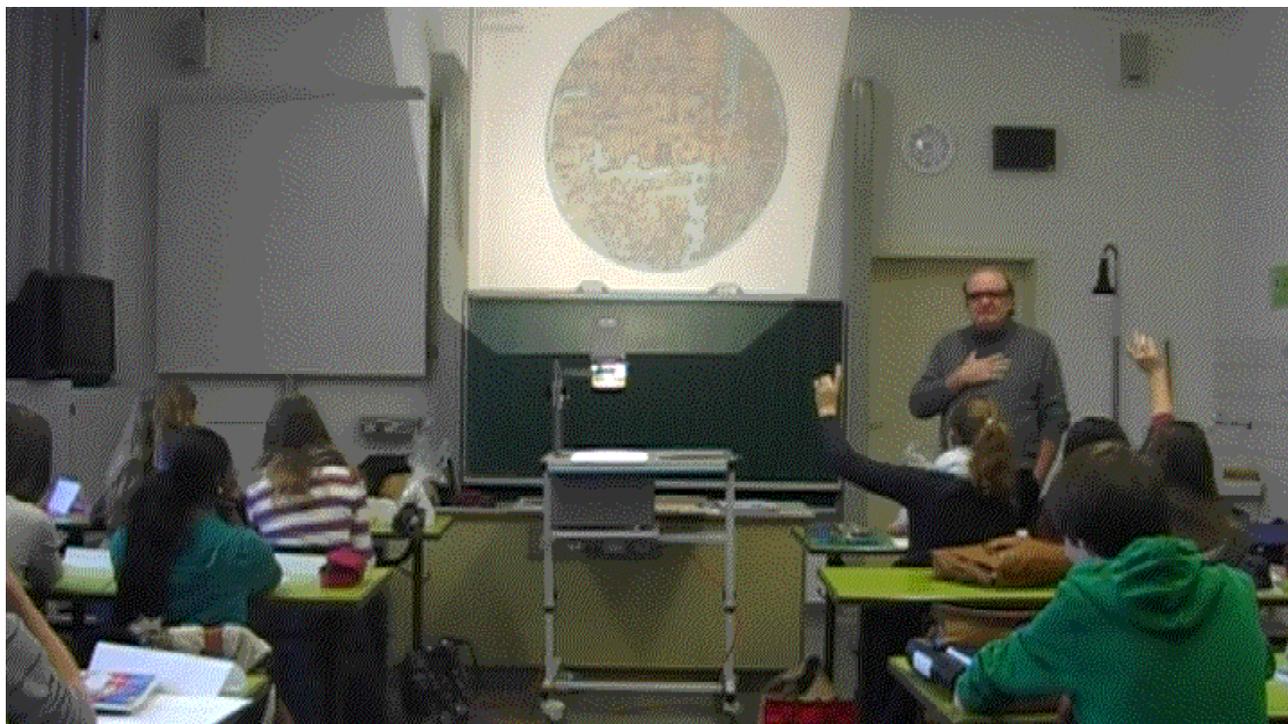


1. 授業事例

Dr. Werner Heil；“中世と近現代ヨーロッパの思考”の授業記録

(2012年12月20日，Goethe-Gymnasium Ludwigsburg，第10学年，15～16歳)



(1) 事例紹介

ここで取りあげる歴史授業は、歴史教師 W.ハイル (Dr. Werner Heil) が2012年12月20日にバーデン・ヴュルテンベルク州ルートヴィヒスブルクのゲーテ・ギムナジウム・ルートヴィヒスブルク (Goethe-Gymnasium Ludwigsburg)<sup>1)</sup>において第10学年生を対象に実践した「中世と近現代ヨーロッパの思考」である。

授業者の W.ハイルはこれまで約30年にわたってギムナジウムで歴史を担当している。1982年から2007年まで、バーデン・ヴュルテンベルク州のニュルティンゲンにあるヘルダーリン・ギムナジウム・ニュルティンゲン (Hölderlin Gymnasium Nürtingen) で勤務し、2007年から現在まで、同州のルートヴィヒスブルクにあるゲーテ・ギムナジウム・ルートヴィヒスブルクで勤務している。氏はそれらでの教育実践を踏まえ、「コンピテンス志向の歴史授業 (Kompetenzorientierter Geschichtsunterricht)」を提起する単著書を公刊しており (Heil, 2012a, 2012b, 他)、1998年よりシュトゥットガルト大学でも教鞭をとっている。

W.ハイルは2012年9月開始の学期中、教員養成のための州のゼミナールを担当し、ゲーテ・ギムナジウム・ルートヴィヒスブルクで授業を担当していなかったため、他の教師のクラスで授業を行うことで授業観察の機会を提供してくれた (生徒は各自、自分の名前を示すために画用紙の手製ネームプレートを机の上に置いていた)。この「中世と近現代ヨーロッパの思考」はいわば投げ込みとして行われたものであるが、中世についての一定の学習を前提としてのものである<sup>2)</sup>。この歴史授業の対象生徒は第10学年生25名であり、授業時間は午前9時40分から10時25分までの45分間である。通常であれば何時間かかけて取り扱う内容を凝縮したものとのことである。

(2) 授業展開

この歴史授業「中世と近現代ヨーロッパの思考」(2012年12月20日)における教師と生徒の発言、資料等を日本語訳して示す (録音状態が必ずしも芳しくなく、発言を聞き取れない箇所があることを予めおことわりしておく)。生徒の発言は挙手によるものである。

なお、①～③の分節化は、観察者である服部によるものである。

①現在と中世における世界の描写の比較分析に基づく見方考え方の新旧対比



教師：これまでの何週間かの間、歴史の授業で一昔前の中世に戻りました。今日はそこにいく前に一つ絵を見せたいと思います。何の絵かわかるはずですよ。

【OHP：グーグルアースの衛星写真の提示】

生徒：ヨーロッパを中心に写した地球の写真ですか。

教師：そう、ヨーロッパを中心にした地球の写真ですね。どうしたらこのような写真ができますか？バステアン [挙手した生徒を指名]。

生徒：衛星で？

教師：そうだね、衛星写真で撮れます。でも、自分でこういう写真が見たいと思ったら？

生徒：グーグルで見る。

教師：え？そう、グーグルね。でもグーグルは自分で撮った写真じゃないでしょ。ただの衛星写真だものね。

生徒：世界地図？

教師：そうだね、宇宙に飛んで行って上から見ないと同じような絵は見えないね。それではこれから全く違う絵を見せますよ、今日の授業のテーマです。

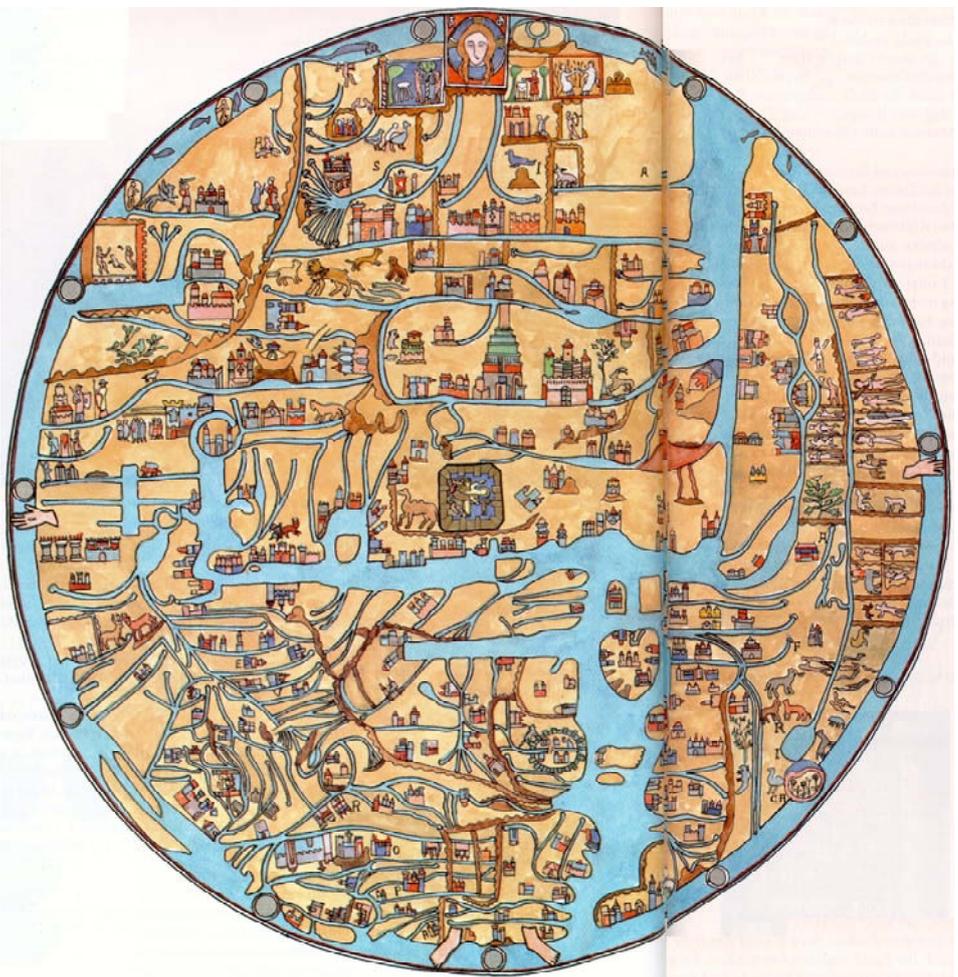
【OHP：エプストルフの世界図<sup>3)</sup>の提示】

教師：さっきのグーグルの写真と共通しているところは、色がついているところかな。そうですね、まわりが円いのも共通しています。

それじゃ、これをよく見てください。ちょっと最初に見るとゴチャゴチャしてややこしいかもね。でも何か気付くはずですよ。もしわからなかったらもう少し簡単なバージョンも用意してあります。アドリアン [挙手した生徒を指名]。

生徒：その海みたいなのは地中海かもしれないです。

教師：そう、この海は地中海です。これでヨーロッパの近くにきた



ね。アドリアン、いいところに気づいた。

生徒：もしかしたら、この絵はエルサレムを中心にした地図ですか？

教師：その通り、ここの中心がエルサレムみたいだね。というか、これはエルサレムを描いた地図だね。その他に気づいた点は？

生徒：この地図は現実に基づいてない。

教師：そうですね、これをもとに旅に出たら大変なことになる。

生徒：上に頭があってその横には両手、下には足があるので、母なる大地を意味してるのかも？

教師：よく気がついたね、すごい。頭と足などをよく見てごらん、何かが見えてくるかな？母なる大地は良い線をいってるけど、ここで表現したいことはそんなに簡単かな？

生徒：これは〔ギリシャ神話の〕エウロパ神かな？

教師：そうも考えられるかも。

生徒：そういう風に見えるけど。

教師：右、左、下を全体的によく見てごらん。下には足があるね、そうその通り。そうしたら、何を意味してる？

生徒：方角を示しているのかもしれない。

教師：そうかもしれないね。じゃあ、どこが北、南、西、東？

生徒：頭が北で、足が南だと思う。

教師：そうなるはずだね。ちょっと想像力をもって見ると、地中海は下から上には流れていないので、こっちのほうがよだね。アドリアン〔挙手した生徒を指名〕。

生徒：スエズ運河を中心にしてみると反対です。

教師：そう、その通り。

生徒：頭は本当は南を示しているはずですよ。

教師：ちょっと回してみようか？

【OHP：エプストルフの世界図を上下逆さまにして提示】

生徒：そう、そういう感じです。

教師：そうしたら頭が？これが正しい方向を示しているね。クリストフ〔挙手した生徒を指名〕。

生徒：頭が逆さまです。

教師：その通り、当たり前だね。よし、別にこのテーマにこだわるつもりはないんだ。もっと簡単に一般的な質問をした方がいいのかも。じゃあ、シンプルに聞くよ、この絵の何が合っているか〔現実に基づいているか〕？この2つの絵を比べると、さっきのグーグルマップとこの絵。そして簡単な問いかけをしてみるよ、何が合っている？

生徒：えっと、地図はいつも北が上になってる…

教師：そう…

生徒：けど、最終的には重要じゃない。

教師：最終的には重要じゃないね。後になって北を上にする地図が出てきたね、南が上になっている地図もあるんだけど、でも、それはここでは大事な点じゃないんだ。全体を見てみて、北、南、西、東についてはもう終わりにしよう。パトリック〔挙手した生徒を指名〕。

生徒：時代によって世界観というのが違いました。

教師：そう、その通り。とてもいい答えです。簡単な答えこそ出なかったけど、何がこの地図で合っているかっていう。今の地図では行きたいところに行けるけど、この地図では行き着けないね。だから、正解だよ。その時代その時代に、その時の地図は合っているんだ。中世の人々はこっちの写真を見て何ていうかな？地球の写真っていうより劇場かもね。

【OHP：グーグルアースの衛星写真を提示】

生徒：人々は理解できないでしょう、そんな上から撮った写真は。

教師：だけど、こっちの絵も上から描いたみたいだよ。両方の絵が上から。

生徒：こっちの写真は薄い板みたいに見えるから、わからないと思う。

教師：薄い板ともいえるけど、けどもっと大事な点、それを見出さないと。

生徒：〔衛星写真では〕アメリカの一部が見えます。

教師：うん、それも見えます。でももっと大きな決定的な違いは？当時の人々がこの地図は全く使えない、これは間違っているっていう理由は。

生徒：衛星写真では水がたくさん見えます。もう一つの方は全然見えません。

【OHP：エプストルフの世界図を提示】

教師：うん、だけどそれは大事な点じゃないんだ。上に頭、左右に両手、下に足、どういう意味？どう考えたって空の上に飛んで行ってみても、衛星写真で撮っても頭と両手なんか見えないよね。

中世の人々は世界をどう見ていた？これで一番大事な点に来たよ。これは誰を表している？

生徒：その当時の人々を守っていた神？

教師：その通り、神だね。方向性は合っているけど、もっと正確に言ってみよう。神は一般的な言い方。どの神が大地に降りてきた？

生徒：イエス？

教師：そう、だからここで示している人は？

生徒：イエス・キリスト。

教師：そうだよ、イエス・キリスト。それでは地球は？この地球はどういう意味？

生徒：キリストの体？

教師：その通り、地球はイエス・キリストの体を表している。現代の世界地図にはないね。これがイエス・キリストの体、現在のグーグルマップには出てこない。じゃ、ここで質問。どうしてこういう世界観になると思う？エルサレムが中心にあって、もっと詳しく見てみると違うものがたくさん書いてあるんだ、もっと大きくしてみると、つまり、ここが楽園だったり、頭の左にあるのが楽園らしい。

生徒：中世の人々はとても信心深かったし、エルサレムは聖なる都市だから中心にあるってこと？

教師：そうそう、それがすごく大事な気がつかないスタート地点。ということは、これが宗教的に見た世界地図ということがはっきりしているね、でも答えはそんなに簡単かな。どうして昔の人たちは、頭や手などをこの中に書いたのかな、まるで本当にそれが見えているかのように。アドリアン〔挙手した生徒を指名〕。

生徒：2つの階層があってイエスが楽園の中で一番上にいて、天が上で大地が下…

教師：そういう決まりはこの絵にはないかもね、そういう絵もあるけどそれには違う絵をもとにしないと。ここでは実際に平面的に表現してあるから。実際には見えないことがこの絵には描いてあるんだ、ここが大事だよ。宗教に関係していて、人々は本当にそれを信じていたんだ。信仰が人々の世界観に影響していた。ここでまた面白い質問。どういう風に関係していた？信仰がこのように世界観に影響するってことは世界観を変えるってことか、それともこれはただの信仰？…〔聞き取れない〕…中世の人々は目で見たものを本当に信じていたのか、それとも目で見たものをあまり信じていなかったのか、うそのものだと思っていた？

生徒：その当時はまだ遠近法での描写のやり方がなかったから、こういう〔現代のような〕世界地図を書くのが難しかった。

教師：そうそう、遠近法の描写方法はその時代にはなかったよ。いつから出てきた？マーティン〔挙手した生徒を指名〕。

生徒：美術史での遠近法ですか？

教師：そう、美術史での、もしくは人間が見る空間の認識。

生徒：16世紀から。

教師：そう、ルネッサンス時代からね。ここでまた質問が出てくるんだ。考え方と空間的な認識はどう関係している？中世の人は実際のものをはっきり見ていたのか、それとも単なる信仰か？マーティン〔挙手した生徒を指名〕。

生徒：えっと、昔の人は教会や王から初めから信じなければならないことを前もって教えられてきた。その他は自分たちで世界観を作っていくんだけど、その中でそれ〔教会や王からの教え〕を理解しようと努力してきた。

教師：そうだよ。私たちは世界を見て、まあ後で私たちにとってどう見えるか詳しく見ていくけど。中世の人は私たちと違う見方をしていた。どの体の部分で私たちは地図を見るか、もし地図がこれ〔衛星写真〕だったら。どのチャンネルを通して見る？ジョナサン〔挙手した生徒を指名〕。

【OHP：グーグルアースの衛星写真を提示】

生徒：目を使って。

教師：そうだね。この写真が私たちが目を通して見た場合。中世の人は目で実際に見るよりももっと多くのことを見ていた。

生徒：宗教的な目で見えていたってこと？

教師：その通り。彼らは宗教的な目で見えていたんだね。この宗教的な目、もうちょっと詳しくやるよ。この人たちは私たちよりももっといい目を持っていたのか、それともただの思い込みなのか、答えは？パトリック〔挙手した生徒を指名〕。

生徒：思い込み。

教師：そう、思い込み、そうだね。疑いの余地なしだね。私たちの世界にはないからね。

教師：これから皆に実際にあった話をするよ。中世のことじゃなくてもっと最近のことで、僕の若い頃の話です。宗教的な目で見えた見方と普通目で見えた見方の違いがわかる。ヒマラヤまで飛んでいく話です。僕が学生の時だから40年ぐらい前の話で、僕の教授が本当に経験したんだ。

教師：その教授はそこで先住民の村を訪れ、コミュニケーションをとるために言語研究者も雇いました。そして、先住民と一緒に草地へ散歩に行き、そうしたら大きな岩がありました。草地を観察したり、岩を観察したりしていたんだけど、教授はその男がナーバスになるのに気が付きました。じっとしてられないようで、すごく興奮している様子でした。それでその男が言いました。今さきほど、悪魔が下りてきて村の住民の一人をこの岩で殴った、そしてその住民は死んでしまった、だから村に帰らなければならないと。彼らが村に帰ると興奮状態になっていて、住民が男は死んでしまった、悪魔が岩でこの男を殴ったのだと言った。話の続きは関係ないので話しませんが、この話の中に大事なテーマがあります。その男は一体どういう目で見えていたのでしょうか。隣にはドイツ人の教授がいて、でもその人にはただの岩しか見えていませんでした。その岩は身動きもせず、ただただ原っぱに立っていた。アドリアン〔挙手した生徒を指名〕。

生徒：その男は物事を通して他の物を見ているんじゃないですか？

教師：そう、たぶん、彼は目にフィルムがついているんですよ。じゃ、それで私たちが言う五感での認識はどうなっているんだろう、その住民たちの場合には？

生徒：たぶん、人それぞれ人生をどう育ってきたかという違いだと思う。

教師：そうだろうね。

生徒：この住民のように生まれた時から宗教的に育った人は、そういうものの見方になるんだと思う。それでドイツ人の教授は、なんとというか、もちろん信仰を持っているんだけど、この住民とは全く違う形の信仰だから、同じようなものの見方を持っていない。

教師：そうだね、だからこういうものの見方は実際の五感での認識と何が違う？ただ身動きもせずそこに置いてある岩に、誰かがこの岩を持ち上げたと言ったら？この男は心の中にあるものが実際に見えるものを変えてしまっていて、それに全く気がついてないんだ。これは全く極端な例だけど、中世においてはそういうことが日常だったんだ。

ここで相異なったかたちの考え方があることがわかるね。一つはこの先住民の考え方。世界史で君たちがすでに勉強した範囲で考えてみると、どこの人たちが同じような考え方をしていた？今まで学校で習った世界史の時代で。ジョナサン〔挙手した生徒を指名〕。

生徒：古代ギリシャ人。

教師：そう、古代ギリシャ人！その頃からは変わってきているかな。ギリシャ人の場合は哲学も入ってくるけど。どの時代に遡る？

生徒：最古の時代の人々。

教師：そう、もっと昔に遡らなきゃならないね。エジプト人、メソポタミア人、そしてシュバーベン地方の太古の時代。だけど、ドイツ人の教授が経験したヒマラヤでの出来事、そこではその考え方が残っているということだね。こういう中世的な思考の仕方は今でもあるかな？宗教的な目でものを見るというような。ニコール〔挙手した生徒を指名〕。

生徒：ファラオとかが権力を持っていた時代ですか？

教師：うん、まあね。でも現在の世界を見てみるとどう？こういう中世的な考え方、後でもっと詳しく見てみるけど、そういう考え方は今の時代でどこに見られる？ここで、どうしてこういうことを考えなきゃいけないかっていうポイントにきたんだけど。

生徒：まず初めに、えっと、第三世界でいろんな事情で教育を受けてない人たち。

教師：う～ん、教育を受けてないというのは言い方が違うかな。教育はどんな人たちも受けているからね。

生徒：いや、でも今僕たちの尺度でいう教育。

教師：あ、そうね。私たちのヨーロッパの尺度でね。教育はみんな受けているけどね…。

生徒：まあ、そうですね…。

教師：そうそう。まあ、だけど、もうちょっと詳しい位置を決めていかないと。今の世の中のどこに、まだこう

いう宗教的な考え方はあるかな？例えばニュースなんかを見ているとわかるでしょう。アドリアン〔挙手した生徒を指名〕。

生徒：イスラム？

教師：もちろん、そうですね。イスラムの世界でしょう、エジプトやアラブ諸国。そのような国ではまだ地方でたくさんの人々が中世的な世界観、考え方を持っているんだ。現在の世界状況を理解するにはこういうことをよく知っておかないといけない、中世のことを話し合うには中世に関してだけでなく現在に関しても話し合う必要があるってことなんだよ。

## ②現在と中世におけるキツツキの説明の比較分析に基づく見方考え方の新旧対比

教師：それでは、ちょっとここでも詳しく見てみるために、プリントを配りましょう。

【資料プリントを配布】【OHPを消す】

〈配付プリント（抜粋）〉

「キツツキは、強くまっすぐで先がとがった鑿のようなくちばしをもった鳥である。特にキツツキ亜科ではくちばしが頭と同じほどの長さである。頭部は振動をやわらげるのに非常に適したものになっており、例えばくちばしと頭蓋の間は弾力的である。薄く平たく、そして固くなっている舌は長く突き出すことができ、獲物をとって離さない鉤のようなものが先についている。」（事典）

「木を突く者は、悪魔に色彩があるように、色とりどりの鳥である。

その木を突く者は、森の中を飛んでは木の上にとまり、くちばしでコツコツたたき、聞き耳をたてる。もし、木の中が空洞であれば、つまり心がなかったら、その中に入って行って巣を作りひなをかえす。もし、木が堅く、健康的な心であれば、キツツキはすぐさま逃げていき、他の木をさがしに行く。

そのようにして、悪魔も森の木々をさがしに来て、つまり人間たちをさがしに来て、槍でコツコツたたき、聞き耳をたてる。もし、その人間が虚ろであれば、つまり心がなかったら、入り込んで巣をつくる。その人間が堅く、健康的な心であれば、悪魔はすぐさま他の森に逃げていく。

フィシオログスは木を突く者という言葉を用いた。」※

※otto・ゼール編『フィシオログスー動物とその象徴的意味』、チューリヒ、1995年（第7版）

教師：それでは。ここで、え？何？何でもないか。ここにある2つの絵〔グーグルアースの衛星写真とエプストルフの世界図〕はもう今までに勉強してきました。その下にある2つの文章を見ていきまし



よう、2つの違った見方のテキストです。自然の中に住むキツツキについて。1つのテキストは現代の見方、もう1つは反対に中世の見方です。だれが読む？じゃあ、現代の見方から。

生徒：〔プリントを音読〕「キツツキは、強くまっすぐで先がとがった鑿のようなくちばしをもった鳥である。特にキツツキ亜科ではくちばしが頭と同じほどの長さである。頭部は振動をやわらげるのに非常に適したものになっており、例えばくちばしと頭蓋の間は弾力的である。薄く平たく、そして固くなっている舌は長く突き出すことができ、獲物をとって離さない鉤のようなものが先についている。」

教師：これはキツツキについて事典に書いてある文章です。ここでまた質問ですが、なぜキツツキについてこのようなことが書いてあるのだろうか。バスティアン〔挙手した生徒を指名〕。

生徒：あ、違います。文章を読みたかっただけです。

教師：それじゃ、後で読んでください。今の文章は今日の私たちがキツツキを描写した文章です。

生徒：……〔聞き取れず〕……

教師：そう、そうですね。さっきやった世界地図などと同じように、五感で認識すること、キツツキはどのような姿かたちをしているのか、どう変化していくのか。さあ、次に中世のキツツキの見方を見ていこう。バスティアン。

生徒：〔プリントを音読〕「木を突く者は、悪魔に色彩があるように、色とりどりの鳥である。その木を突く者は、森の中を飛んでは木の上にとまり、くちばしでコツコツたたき、聞き耳をたてる。もし、木の中が空洞であれば、つまり心がなかったら、その中に入っていつて巣を作りひなをかえす。もし、木が堅く、健康的な心であれば、キツツキはすぐさま逃げていき、他の木をさがしに行く。そのようにして、悪魔も森の木々をさがしに来て、つまり人間たちをさがしに来て、槍でコツコツたたき、聞き耳をたてる。もし、その人間が虚ろであれば、つまり心がなかったら、入り込んで巣をつくる。その人間が堅く、健康的な心であれば、悪魔はすぐさま他の森に逃げていく。フィシオログスは木を突く者という言葉を用いた。」

教師：フィシオログスは中世の生物学者の意味です。ここでまた現実の物を観察する2つの違う目が出てきました。1つは現代の私たちに身近な、ヨーロッパ的な科学的な目といえいいのかな、そしてもう1つはまた中世の目。さて、ここで中世の目は何を見ているでしょう？

生徒：僕たちの今の世界観からは、キツツキというものは木を突いて幹が空洞であればそこに巣を作る。キツツキが巣を作らず他へと飛んでいけば、木の幹がしっかりしているという事がわかる。中世では……〔聞き取れず〕……

教師：いいね、もう大事な点を挙げてくれたよ、クリストフが。みんな、わかったかな？アニカ、今、彼の挙げた大事な点を言ってくれる？中世の見方と今の私たちの時代の見方の違いを。

生徒：完全に現実に基づいているわけじゃなく……〔聞き取れず〕……

教師：そうすると、中世の人々にとって事実はどういう意味があったのかな？簡単に言うと、彼らはキツツキの何に興味を持っていたと思う？クリストフ〔挙手した生徒を指名〕。

生徒：キツツキが木を突いたその後のこと。

生徒：中世の人は、えっと、人間を木にたとえていて、もし人間が悪い心を持っていたら、その人間にキツツキが来て巣を作る、もし人間が強い健康的な心の持ち主であれば、キツツキは近寄りもしないということ。それで、木は人間の象徴でこれもまた信仰の一部だと思う。

教師：うん、うん、そうだね、素晴らしい。みんな素早く見つけたね、すぐに意味がわかったようだね、すごいよ。じゃあ、ここでまた大事なポイントを見つけよう。中世の人たちはキツツキをどう見ている、今の人たちはキツツキをどう見ている？ここでまた違った考え方が出てくるね。

生徒：現代の人は物事を、自然をそのまま観察して自分でそれについての説明ができるが、中世の人々は説明されたことをただ信じていた。

教師：その通り。意見をまとめてみよう。現代の人はキツツキを見て、それがどういう動物かが知りたいと思うと、見たものをそのまま観察して調べる。中世の人はキツツキという動物自体にそれほど興味があったわけではなく、キツツキというものを通して何か他の物を見ていたんだね。問題は、中世の人はキツツキの一体何に興味を持ったか、何を知りたいと思ったのか、一体キツツキの何を調べたいのか。

生徒：比喩として見ていた。

教師：そう、比喩としてみていたんだね。でも、どんな意味がある比喩？キツツキは、何の比喩、象徴だった？えっと、誰が先だったかな？〔2人の生徒が手を挙げている〕

生徒：キツツキは悪い悪魔の象徴で、人々はそれに合わせて自分の生活を形成してきた。

教師：うん、そうだね、もうちょっとシャープに表現してみようか。

生徒：同じような感じだけど、人々は日頃から良い行いをしようと思っていた。

教師：うんうん。直接的に問いかけてみるなら、人々はキツツキを見てどんな教えを習うべきだった？中世は？現代の人々はキツツキを見てその生態を知りたいと思うよね。

生徒：健康な心を持っていないくて、真黒で汚い心を持っていると…。

教師：そう、その通り。

生徒：……〔聞き取れず〕……

**教師**：そうでしょう。健康な木は、健康な人間で断固とした信仰を持っていることを示していて。よし、じゃあ、現代の人々は何を実際のものだと考え、中世の人々は何を実際のものだと考えていた？

**生徒**：現代の人々は身体的な目で見えたものを事実であると考えていて、中世の人たちは自分たちの中にある宗教的な目で見えたものを信じていた。

**教師**：そうだね。じゃあ、中世の人たちはどんな実際の世界を見ていたの？

**生徒**：宗教上で教えられてきたことをそのまま。

**教師**：そう。どんなことを教えられてきたのかな、実際の世界というのは中世の人たちにとって何だった？これは絶対に疑いがない物だといえるものは。

【OHP：エプストルフの世界図を提示】

**教師**：また、この絵に戻って、この中世の絵。この絵の中で絶対的な事実っていうのはあるかな？目では実際に見えないもので。クリストフ〔挙手した生徒を指名〕。

**生徒**：表面的に見えるものは地球の大地だけだけど、本当はもっと深い意味がその後ろに隠されていて、中世の人たちにとってはもっと深いものがそこに隠されていて、キリストの体というものが信仰に結びついている……〔聞き取れず〕……

**教師**：そう、そうだね。この絵をよく見るとわかると思うけど、これはただの絵だけれど中世の人たちは神というものをこの絵を通して見ていたんだ。ここでまた質問。どうして自然に対してこういう見方ができたのかな？どうしてこういうことが中世の人たちが生きていく上での教えになっていたわけ？何かの意味が隠れていると思うけど。

**生徒**：何かの神様を通して、世界をわかりやすく理解させるために。

**教師**：うん、その通り。これが何て言うか、自然をよく理解して、価値のあるものだと理解したら、神の教えもわかるはずだという意味なんだ。でも自然はどういう意味だった？今の時代とくらべると？今日では自然は僕らにとって。

**生徒**：今日では自然はきれいな景色やインパクトだけど、でも昔は自然は本のように読まなければならないものだったんだと思う。

**教師**：そうだよ、その通り。素晴らしい表現だね。そういう風に解釈できるんだよ。自然は本のようにして読めるものだったと。今日の自然科学においては、自然の中のものを読み取っている。だけど、自然の何を読み取っているの？

**生徒**：中世は本の行間にあるものを読み取っていたけど、僕らはそこに書いてあるままだを読み取る。

**教師**：私たちはそこに書いてあることをそのまま読んで、地球のことや自然のことが知りたいって思うけど、中世の人々はそれを通して何かを見ていたんだ。他のことを知りたいって思っていた。授業の初めにやっていたことを思い出して。一体、何が知りたいって思っていたんだと思う？自然やキツツキに関して知りたいんじゃないくて、他のものを知りたいって思っていた。

**生徒**：もしかして、神様について？

**教師**：そう、その通り。彼らはこの人間の世界を作った神のことについて知りたいって思っていたんだ。それじゃ全部まとめてみると、中世におけるの学問というのは何だった？実際に目で見ているものではなく、目に見えないものが大事だったんだよね。ジョナサン〔挙手した生徒を指名〕。

**生徒**：精神的な学問だったというか、頭で理解するのとは違って心の中からくるような。

**教師**：そう、頭で理解するっていうのも合っているんだよ。けれど外観的な認識にとどまらず、こういう質問してみたらどうかな。何がっていうことじゃなくて？

**生徒**：教えを示したいと思った？

**教師**：その通り。一体、神が何を自分に言いたいのか、何を教えたいのか、神の存在が何であるか。今言った通りに、中世の人々は、自分にとってどういう意味があるのか、そこに隠れている神の教えは何なのかということを考えて世界観を作っていたんだ。だけど、どうして自然の中に神の教えが隠れているのだろうか？人々の考え方や生活の仕方についての教えが。

**生徒**：……〔聞き取れず〕……

**教師**：それを読み取ることが中世の人たちの課題だったんだね。

③時間的対比による見方考え方の対象化



教師：よし、十分話し合ったね。でも、まだ何も書きしるしてないね。

【OHP：表「自然の観察」を提示】

自然の観察	
近現代的	中世的
<ul style="list-style-type: none"> <li>・キツツキの行動の実証的な描写</li> <li>・キツツキそのものが重要</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キツツキの行動の選択的な描写</li> <li>・キツツキそのものではなく、キツツキによって神が人間に与えようとしている教えが重要</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・キツツキが目的そのもの、キツツキやその行動が理解されるべき</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キツツキは人間の行動のための典型・比喩</li> </ul>
自然とは現実である	自然とはより高度な現実の比喩である

教師：書く必要はありません、僕からプリントを渡します。え？何？そう、裏に記入してない表があります。時間がもっとあったら、自分たちで記入してもらおうつもりだったんですが、45分しかないから、僕から記入してあるプリントを渡します。

【プリントを配布】

生徒：……〔聞き取れず〕……教師：そうだね、それが現代における中世的な考え方だね。私たちであれば、そんなのはバカバカしいって言うけど、中世の人たちは違う見方をしていた。

教師：ちょっとここでまた、まとめましょう。えっと、私たちの自然の見方はわかったかな？まとめるとこのようになるんだけど。そしてこれが私たちの世界地図の見方のまとめ。

【OHP：表「世界地図」を提示】

世界地図	
近現代的	中世的
<ul style="list-style-type: none"> <li>・地球の実証的な知覚</li> <li>・目で見える物だけが見える</li> <li>・専ら感覚が知覚を規定する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地球の神学的な知覚</li> <li>・信じる物や想定する物が"見える"</li> <li>・考えが知覚に関与する</li> </ul>
科学的な思考	神学的な思考



教師：そして、ここでは現代における感覚というものを見てみよう、五感で認識することを今日では科学的というんだけど。そして、中世時代は神学的な知覚。ここでは物事を宗教的な目で見て…… [聞き取れず] ……そして、考えることが知覚することに影響しているんだ。

教師：そして、現実に対してのまとめをしてみると。人間にとって現実とは何だろう？

【OHP：表「現実」を提示】

現実		
ヨーロッパ近現代	・感覚による経験	・ヨーロッパ近現代
中世	・神と天使 ・悪魔と悪霊	・ヨーロッパ中世 ・今日？
早期	・神々と靈魂	・ゲルマン人 ・エジプト/メソポタミア ・今日？

教師：まあちょっと 45 分しかないからね、ささっといかないといけないんだけど。現代のヨーロッパで私たちヨーロッパ人にとっては、五感で経験したことが現実であるとする。中世は、神は実在のものだと信じて、疑うことを知らなかった。そして、神々や霊などは最古の時代から、ヒマラヤでのあの住民の話はここからきているね。そして、ヨーロッパの中世、ゲルマン、エジプト、メソポタミア [表を見て読みあげる]

教師：質問ですが、こういう中世的な考え方は今の世の中でどの辺で見える？中世的な考え方は、今日、どこにある？

生徒：貧しい国々に。

教師：もっと大きな声で。

生徒：貧しい国々？

教師：いや、特に貧しい国ってことはないね。

生徒：近東の国。

教師：そうだね、宗教が根強い文化になっている国、イスラムの世界。それなら、この考え方は、神々や霊が現実だという考え方は今日の世界のどの辺にある考え方かな？ヒマラヤだけじゃなくて。こういう考え方を持った人たちに会ったり、こういう人たちを見たりできる場所はどこかな？

生徒：特に違う大陸じゃなくても小さな村とかにもあると思う。実際、僕も村出身だし。

教師：うーん、そっか。でも大陸でいうとどうかな、世界のどの方？

生徒：北アメリカのインディアン民族とか、南アメリカも。

教師：その通り。インディアンそして南アメリカね。クリストフ [挙手した生徒を指名]。

生徒：アフリカやシベリア地方も。

教師：そう、例えばステップとかね。今やってきたこのこと全体が、世界史を理解するための基本になる考え方なんだよ。

教師：急いでさっと流していきましたが、これを学問という次元で見た場合は、こんな風になります。

【OHP：表「(自然) 学問」を提示】

(自然) 学問		
近現代	科学的説明	・自然そのものやその法則が理解されるべきである ・本当の物とは感覚的世界である
中世	神学的解釈	・自然は神の創造物であり人間の行動のための教示である ・本当の物は感覚的世界の背後にある－神
古代 (ギリシア)	哲学的解釈	・自然はアイデアが写しだされたものであり哲学的理論に応じた状態である ・本当の物は感覚的世界の背後にある－アイデア
エジプト / 石器時代	神話	・自然は神々の作用である ・本当の物とは神々である

教師：現代は科学的な説明しかありません。それで自然やその法則が理解されます。現実とは五感で感じた世界

でしかありません。中世はというと、自然は創造物であり、人間の行動への教示でした。本当の物は感覚的世界の後ろに隠されている、つまり神です。古代は今日はやっていないので省きます。その次に続くのは石器時代のエジプト人の思考、本当の物は神々だけであった。何というか、こういうことを理解しておけば、みんなも世界史の中で自分を見定めることができます。こういうことをよく理解していれば、他文化の人々を笑ったり、変だと思わないと思います。オーケー。じゃ、今日はこれで終わりです。みんなよく聞いて授業に参加してくれてありがとう。それでは、良い休暇とクリスマスを。



## 2. 歴史授業「中世と近現代ヨーロッパの思考」の構成

このような歴史授業「中世と近現代ヨーロッパの思考」の構成について検討してみよう。

### (1) 見方考え方の新旧対比に基づく歴史授業

この歴史授業の全体は大きく3つのパートから成り立っている。

- ①現在と中世における世界の描写の比較分析に基づく見方考え方の新旧対比
- ②現在と中世におけるキツツキの説明の比較分析に基づく見方考え方の新旧対比
- ③時間的対比による見方考え方の対象化

パート①は、現在と中世における世界の描写を比較分析するパートである。グーグルアースの衛星写真とエプストルフの世界図とに描写の違いを見つけさせ、どのように世界全体の見方が異なっているか、それぞれの見方が違うのはどうしてかを考えさせている。その上で、ヒマラヤでのドイツ人教授の体験を検討させ、中世と同様な現実についての観念が現在の一部地域における場合にも見出されることを確認させている。

パート②は、パート①の学習成果を踏まえ、現在と中世におけるキツツキの説明を比較分析するパートである。事典の文章とフィシオログスの文章による説明の違いに着目させ、自然の個別事物に対する見方がどのように異なっているか、それぞれの見方が違うのはどうしてかを現実についての観念と関連づけながら考えさせている。その上で、現在と中世における学問の観念について掴ませている。

パート③は、時間的対比に基づき、新旧の見方考え方の特質を理解し、現在の自分たちの見方考え方を対象化するパートである。パート①・②で直接的に取り扱った「自然の観察」と「世界地図」という観点でまとめ、それらを踏まえてさらに「現実」とそれを取り扱う「学問」の両観点から学習成果を整理し、現在の見方考え方と中世の見方考え方の特質を理解させ、自分たちがもっている見方考え方を歴史的に対象化させようとしている。最後に、「こういうことを理解しておけば、みんなも世界史の中で自分を見定めることができます。こういうことをよく理解していれば、他文化の人々を笑ったり、変だと思わないと思います。」と結んでいる。

全体を通して、資料を介した教師と生徒の問答を中心にして授業が展開され、生徒は教師の指導のもとに資料に取り組み、活発に挙手して発言し、見方考え方の理解をうみだしていつている。

このような歴史授業「中世と近現代ヨーロッパの思考」で教育内容として目指されているのは、中世のものの見方考え方の理解、そして、それとの対比に基づく現在の自分たちのものの見方考え方の対象化である。ものの見方考え方を現実についての観念と現実を扱う学問についての観念として扱い、中世と現在の見方考え方の特質を掴ませようとしている。そのために主たる教材として取りあげられているのが、グーグルアースの衛星写真やエプストルフの世界図、また、キツツキに関する事典の文章やフィシオログスの文章という具体的な資料である。現在と中世における現実についての観念や学問についての観念に迫らせるため、世界全体の見方や個別の自然的事物の見方を表す新旧の具体的素材が取りあげられている。

それらの取り扱いにおいては、現在の素材から中世の素材へという順序で取りあげている。そして、時間的制

約のため、やや誘導的であるけれども、生徒がそれぞれの素材を読み解き、両者をくらべ、見方の違いや理由を考える取り組みを重んじている。世界全体の描写から個別事物の説明へという対象の移行に即して、そのようにして理解をうみだす取り組みを生徒がパート①とパート②で繰り返しつつ深められるように導き、最後にパート③で現実についてとそれを扱う学問についての観念に関して対比表によって整理し、現在の見方考え方を対象化させようとしている。表による整理をパート①とパート②という個々のパートで行わず、最後にパート③でまとめて行ったり、生徒自身に表を作成させるのではなく、教師が表を提示したりしているが、それらは45分間のなかにおさめようという配慮のためである<sup>4)</sup>。

このように「中世と近現代ヨーロッパの思考」は、現在と中世における世界全体の描写や個別事物の説明を取りあげ、新旧の描写・説明を比較分析する考察を求め、世界全体の描写の比較分析から個別事物の説明の比較分析へと導くことにより、中世と現在における現実やそれを扱う学問についての観念を対比的にとらえられるようにしようとするものである。

## (2) 「コンピテンス志向」の歴史授業

このような授業構成のねらいについて、W.ハイルの著書に示されている2つの表をもとに考えてみよう。

表1は、氏が歴史教育を通して育成すべきと考えるものを簡略的に示したものである。

表1 W.ハイルの歴史教育目的観

歴史授業の目的：	オリエンテーション・コンピテンス 行為コンピテンス
手段：	方法コンピテンス 専門コンピテンス

(Heil, W., *Kompetenzorientierter Geschichtsunterricht*, Verlag W. Kohlhammer, 2. Auflage 2012, S.82)

W.ハイルが歴史教育目的の中核に位置づけるのが、「オリエンテーション・コンピテンス (Orientierungskompetenz)」の育成である。「オリエンテーション・コンピテンス」とは、「歴史のなかでの定位とアイデンティティの理解」ができることである (Heil, 2012a : 77)。「生徒は自らが生きている歴史的な世界のなかで定位することができるべきである」、また、「生徒は今ある自分が歴史を通してうまれていることを理解すべきである」と考えられている (Heil, 2012a : 77-78)。歴史を参照することで定位することができる「オリエンテーション・コンピテンス」の土台となるものが「方法コンピテンス (Methodenkompetenz)」と「専門コンピテンス (Sachkompetenz)」である。「方法コンピテンス」は、「再構築と脱構築」の能力、及び、「文献・画像の解釈、地図による作業、遺物や遺跡の適切な取り扱い、等々の能力」である (Heil, 2012a : 78)。歴史の構築とそのための史資料活用の両能力が方法コンピテンスと考えられている。「専門コンピテンス」は、「生徒がオリエンテーションや史料などの解釈ができるために何を知っていたりできたりしなければならぬか」にあたるものである (Heil, 2012a : 81)。さらに、これら「3つのコンピテンスを通して得た認識や能力に基づいて根拠をもって行為することができる」ことが「行為コンピテンス (Handlungskompetenz)」である (Heil, 2012a : 81)。

このようにW.ハイルは、「方法コンピテンス」と「専門コンピテンス」だけでなく、両コンピテンスを土台とする「オリエンテーション・コンピテンス」の育成を目指し、それらを通して「行為コンピテンス」の育成もすすめようと考えている。「オリエンテーション・コンピテンス」や「行為コンピテンス」を重んじ、そのための手段となるものとして「方法コンピテンス」と「専門コンピテンス」を位置づけなおし、それらの育成を目指すことにより、現在や未来を生きる生徒にとっての歴史教育の意義を拡大させようとしている。今回の授業「中世と近現代ヨーロッパの思考」は、基本的には、これまで生徒が育んできている「専門コンピテンス」と「方法コンピテンス」を活かして新旧の資料に取り組みせ、中世と現在のものの見方考え方に迫らせることにより、見方考え方の時代による違いやその理由に気づかせるとともに中世との対比において現在の自分たちの見方考え方を歴史的に対象化させ、自己定位する「オリエンテーション・コンピテンス」を促進させようとしたものといえる。

氏が歴史教育目的の中核に位置づける「オリエンテーション・コンピテンス」の概要についてまとめているのが表2である。

表2の左側には「知っていること (Wissen)」という「知識基盤」が提示され、右側には「できること (Können)」という「行為基盤」が提示されている (Heil, 2012a : 96)。

「知っていること」として示されているのは、「分野」と「カテゴリー」である。「分野」は「歴史世界を構成する領域」(Heil, 2012a : 88)であり、歴史教育のスコープと考えられているものである。「支配」「社会」「法」「経済」また「戦争」という現実世界のあり方に関する領域だけでなく、それらの底流に通底し現実世界の創造

にもかかわる「現実」「自己理解」「宗教」「学問」という見方考え方に関する領域も挙げられている (Heil, 2012a : 95, 参照)。見方考え方の領域を含め、現実世界に関する幅広い領域が取り入れられている。各々の「分野」の「カテゴリー」は、「カテゴリー的類型論的概念」であり、「下位分野」とも呼ばれている (Heil, 2012a : 89)。

「支配」において「民主政治」「貴族政治」「神権政治」「部族支配」が挙げられているように、各々の領域ごとに主要な類型が設定されている。歴史における定位や歴史による定位というオリエンテーションのための基本的な領域と各領域の主要な類型が「オリエンテーション・コンピテンス」の「知識基盤」と考えられている。

一方、「できること」として示されているのは、「水準段階」と「作業要素」である。「水準段階」は思考操作の3つのレベルであり、それぞれのレベルの主要な要素が「作業要素」として挙げられている。第1レベルは、「再生」であり、「分野内容の再現」である。「分野内容を言う」、「分野内容を時間的に整理する」、また、「自分の立場を述べる」、「自分のアイデンティティを言う」などがその主要な要素である。第2レベルは、「問題意識」であり、「分野内容について問う」、「分野内容の展開について問う」、「分野内容の相互の関連について問う」である。「分野内容の関連性に対して問いを立てる」、また、「立場の意味を解説する」、「アイデンティティを分析する」などが主要な要素である。第3レベルは、「問題解決」であり、「分野内容を評価づける」、「方法面の熟考」である。「分野内容を評価づける」、「分野内容の妥当性を理由づける」、また、「立場やアイデンティティを評価づけ価値づける」、「未知の物事の理解を一定の方法に基づいて理由づけ導き出す」などが主要な操作である。第1レベルは、各々の「分野」や「カテゴリー」について記述することを中心とし、第2レベルは、個々の知識に基づいて掘り下げ各分野内や分野間を結びつけて問うことや説明することを中心とし、第3レベルは、歴史上の事象・展開について評価判断することやそれをメタ的に熟考することを中心としている。歴史における定位や歴史による定位というオリエンテーションのための3つのレベルの思考操作が「オリエンテーション・コ

表2 W.ハイルが重視する「オリエンテーション・コンピテンス」の概要

オリエンテーション・コンピテンス： 生徒は、(a)歴史のなかで定位することができる (b)歴史によって定位することができる（立場やアイデンティティ）			
分野	カテゴリー	水準段階	作業要素
・支配	・民主政治 ・貴族政治 ・神権政治 ・部族支配	(a)再生 ・分野内容の再現	(a)再生 ・分野内容を言う ・分野内容を時間的に整理する等々 ・自分の立場を述べる ・自分のアイデンティティを言う等々
・社会	・市民社会 ・身分制社会 ・共同的な社会		
・法	・法的平等 ・身分法あるいは集団法 ・無法		
・経済	・市場経済 ・重商主義 ・封建制 ・集団経営	(b)問題意識 ・分野内容について問う ・分野内容の展開について問う ・分野内容の相互の関連について問う	(b)問題意識 ・分野内容の関連性に対して問いを立てる等々 ・立場の意味を解説する ・アイデンティティを分析する
・現実	・感覚的現実 ・象徴的現実 ・精神的現実 ・神学的現実		
・自己理解	・個人主義 ・分立主義 ・集団主義		
・宗教	・宗教の自由 ・一神信仰 ・多神信仰	(c)問題解決 ・分野内容を評価づける ・方法面の熟考 (問題解決能力, 熟考)	(c)問題解決 ・分野内容を評価づける ・分野内容の妥当性を理由づける等々 ・立場やアイデンティティを評価づけ価値づける ・未知の物事の理解を一定の方法に基づいて理由づけ導き出す
・学問	・科学 ・解釈 ・神話		
・戦争	・戦争の非難 ・神聖なる戦争 ・正義の戦争 ・自然状態としての戦争		
知っていること		できること	

(Heil,W., *Kompetenzorientierter Geschichtsunterricht*, Verlag W.Kohlhammer, 2.Auflage 2012, S.97, *Welt des Mittelalters und der Frühen Neuzeit*, Verlag W.Kohlhammer, 1.Auflage 2012, S.9)

ンピテンス」の「行為基盤」と考えられている。

このようにオリエンテーションのために有すべき「知識基盤」とそれを用いて遂行できるべき「行為基盤」とで、歴史教育目的の中核である「オリエンテーション・コンピテンス」がとらえられている。

「中世と近現代ヨーロッパの思考」は、この「オリエンテーション・コンピテンス」の育成に向けたものである。この授業は、「歴史のなかで定位することができる」ように導くべく、教育内容として、「現実」と「学問」という分野で現在の自分たちがもっている見方考え方を歴史的な対比のもとに対象化させることをねらっている。そのためにパート1では、分野「現実」の範疇において学習をすすめるべく、新旧の世界地図などを教材として取りあげ、それらを比較分析させ、現在と中世における世界の見方を理解できるようにするとともに、現実についての観念を対比的にとらえさせようとしている。パート2では、分野「現実」と関連づけつつ、分野「学問」の範疇において学習をすすめるため、キツツキについての新旧の説明を教材として取りあげ、それらを比較分析させ、現在と中世における自然的物事の見方を理解できるようにするとともに、学問についての観念を対比的にとらえさせようとしている。また、まとめにあたるパート3では、それらの学習の成果を整理し、現在の自分たちの見方考え方を時間的対比のもとに対象化させ、「こういうことを理解しておけば、みんなも世界史の中で自分を見定めることができます。こういうことをよく理解していれば、他文化の人々を笑ったり、変だと思ったりではないと思います。」と結んでいる。確かに、時間的制約のため、思考操作の第2レベルまでに重点をおき、歴史的な比較分析を学習方法として重視しており、第3レベルについては促す程度に留まっていることは否めない。とはいえ、「現実」と「学問」という個々の分野のなかで現在と中世の比較分析をさせたり、世界の描写の比較分析から自然的物事の説明の比較分析へという授業展開において2つの分野を関連づけて考察させたりし、それらを通して現在の自分たちがもっている見方考え方を対象化させる。「オリエンテーション・コンピテンス」における「知識基盤」と「行為基盤」を生徒が授業前よりも一歩高められるように導こうとしている。

W.ハイルは、「方法コンピテンス」・「専門コンピテンス」を土台とする「オリエンテーション・コンピテンス」とそれに基づく「行為コンピテンス」の育成に向けた歴史授業を「コンピテンス志向の歴史授業 (Kompetenzorientierter Geschichtsunterricht) (Heil, 2012a, 2012b)」と呼んでいる。「中世と近現代ヨーロッパの思考」は氏が標榜するこの「コンピテンス志向の歴史授業」の一例と受けとめることができるだろう。

### 3. 歴史授業「中世と近現代ヨーロッパの思考」の特質

W.ハイルの歴史授業「中世と近現代ヨーロッパの思考」は、次の3点において大きな特質を有するものといえるだろう。

第1は、ものの見方考え方の歴史について取り扱っていることである。政治史や経済史に偏せず、また現実世界そのものの歴史に限定せず、この授業は現実世界の見方考え方の歴史を扱っている。現在の見つけなおしや問いなおしをより促すため、授業で取り扱う歴史を拡大させている。これはたまたまではなく、「オリエンテーション・コンピテンス」の「知識基盤」である「分野」の設定によって導かれている。「分野」は歴史教育の課程編成においてはスコープとして働くものであるため、氏はカリキュラムレベルでも歴史教育の新たなあり方を提起しているといえる。

第2は、過去におけるものの見方考え方を理解させるだけでなく、それとの対比において現在の自分たちのものの見方考え方を対象化させることを授業のねらいとしていることである。多くの歴史授業は現在とは無関係に過去を過去として学ばせる。それらに対し、この授業は「オリエンテーション・コンピテンス」の育成に向け、過去の認識だけでなく、それを介した現在の認識をねらっている。生徒が現在のヨーロッパの自分たちを歴史のなかで相対化できるようになることを重んじている。現在との対比によって過去がわかり、過去との対比によって現在がわかると考えており、過去をわかることと現在をわかることを同時に可能にしようとしている。

第3は、生徒自身が現在と過去の具体的な素材について比較分析することで内容を探究することが授業の基軸をつくっていることである。世界全体の描写やキツツキの説明は、現実についてや学問についての新旧の観念が表れた適例という理由だけで選択されているわけではなかろう。生徒が興味関心をもてること、しかも頭の中に持っているものを使って取り組めることも大きな選択理由となっていよう。そのような素材を取りあげているからこそ、投げ込みの授業であるにも拘わらず、生徒が自分なりに考え活発に挙手し発言することが可能になっている。この歴史授業は時間的制約があっても誘導的な部分も見られるけれども、教師が内容を伝達するのではなく、生徒が「オリエンテーション・コンピテンス」を高められるように教師の指導の下で具体的な資料に取り組むことで現在から過去さらに過去から現在へと内容探究をすすめることをねらっている授業である。

これらの特質に基づき、W.ハイルの「中世と近現代ヨーロッパの思考」は、「オリエンテーション・コンピテンス」の育成のための授業構成をとり、歴史学力像と歴史授業を一貫させようとするものといえる。日本の一般

的な中等歴史授業を省みるとき、歴史授業のあり方だけでなく、歴史学力像のあり方だけでもなく、それらをあわせて問いなおすことが課題として浮かびあがってこよう。

## 註

1) ドイツのギムナジウムとは、大学進学に向けた中等教育一貫校である。州によって違いがあるが、一般的には第5～12・13学年の教育課程からなる。ギムナジウム（上級段階）の修了資格（大学入学資格）がアビトゥーアである。アビトゥーア試験における歴史の試験課題については、服部（2013）を参照されたい。

ゲーテ・ギムナジウム・ルートヴィヒスブルクは、バーデン・ヴュルテンベルク州の州都シュトゥットガルトに近いルートヴィヒスブルクにあり、ルートヴィヒスブルク駅の近くに位置する。同校のホームページは、[www.goethe.lb.bw.schule.de/](http://www.goethe.lb.bw.schule.de/)



Goethe-Gymnasium Ludwigsburg  
(2012年12月20日、服部撮影)

2) バーデン・ヴュルテンベルク州のギムナジウムにおける教科歴史の内容を同州の2004年版教育計画に提示されている各学年の内容項目によって示すと、次の通りである（Ministerium für Kultus, Jugend und Sport des Landes Baden-Württemberg, 2004: 215-232）。

### [第5・6学年段階]

1. 歴史的時間への接近
2. 先史時代における生活
3. エジプトー早期の高度文明
4. 古代における生活の場の比較
5. ローマ世界帝国における生活
6. 古代の名残

### [第7・8学年段階]

1. 中世と近世の社会と文化
2. 近代ヨーロッパの展開
3. 帝国, 帝国主義, 第一次世界大戦
4. ロシア革命

### [第9・10学年段階]

1. ワイマル共和国とナチズム
2. 国際・ヨーロッパの文脈における1945年以後のドイツ
3. ヨーロッパの多様性と統一性（アイデンティティ形成の諸形態, 古代におけるヨーロッパのルーツ, 中世におけるヨーロッパの形成, 近代性へ向けたヨーロッパの出発）

### [コース段階（週2時間のコース）]

1. 18世紀以降の経済・政治・社会における近代化の過程
2. 民主制と独裁制の緊張状態のなかのドイツ
3. 国際関係・ヨーロッパという文脈における1945年以後のドイツ
4. 歴史的パースペクティブにおいての現代の焦点と展開

### [コース段階（週4時間のコース）]

1. 18世紀以降の経済・政治・社会における近代化の過程
2. 民主制と独裁制の緊張状態のなかのドイツ
3. 国際関係・ヨーロッパという文脈における1945年以後のドイツ
4. 国際政治における対立と協同

同州のギムナジウムでは通常、第6学年から歴史の授業を開始し、第9学年まではドイツ・ヨーロッパ中心の年代史的教育を行う。第10学年で「ヨーロッパの多様性と統一性」というテーマに従って近代化までを振り返らせ、その上で第11学年以降の週2時間あるいは週4時間のコースを履修させて近現代史的教育を行う。

なお、今回の歴史授業「中世と近現代ヨーロッパの思考」は、第10学年の「ヨーロッパの多様性と統一性」の学習の一環において投げ込みとして実施されたものである。

- 3) エプストルフの世界図は、エプストルフ（ニーダーザクセン州）のベネディクト会修道院で発見された地図で、1300年頃に作成されたとされる。1943年の空襲で焼失した。
- 4) W.ハイルによれば、氏はこの主題を取り扱った授業をこれまでに何度も行ったことがある。そのなかでも、空欄の対比表を配布し、個々の生徒自身が新旧の資料の検討を通して世界全体の見方や個別事物の見方、さらに現実についての観念や学問についての観念を対比的に特色づけ、それらを踏まえてクラス全体でディスカッションを行うことで新旧のものの見方考え方を探っていく授業が最も効果的であった。今回の授業では時間的制約により、そのような生徒の取り組みを断念したという。

#### 主要文献・資料

- Heil, W., Kompetenzorientierter Geschichtsunterricht, Verlag W.Kohlhammer, 2.Auflage 2012a.
- Heil, W., Welt des Mittelalters und der Frühen Neuzeit, Verlag W.Kohlhammer, 1.Auflage 2012b.
- Ministerium für Kultus, Jugend und Sport des Landes Baden-Württemberg, Bildungsplan Allgemein bildendes Gymnasium, 2004.
- 服部一秀「ドイツの後期中等歴史教育における学力像－EPAを手がかりとして」、『日本教科教育学会誌』第36巻第1号, 2013年.

《本資料で紹介したGoethe-Gymnasium Ludwigsburgでの授業の収集については、

Dr. Werner Heilのご厚意に心から感謝したい。》